

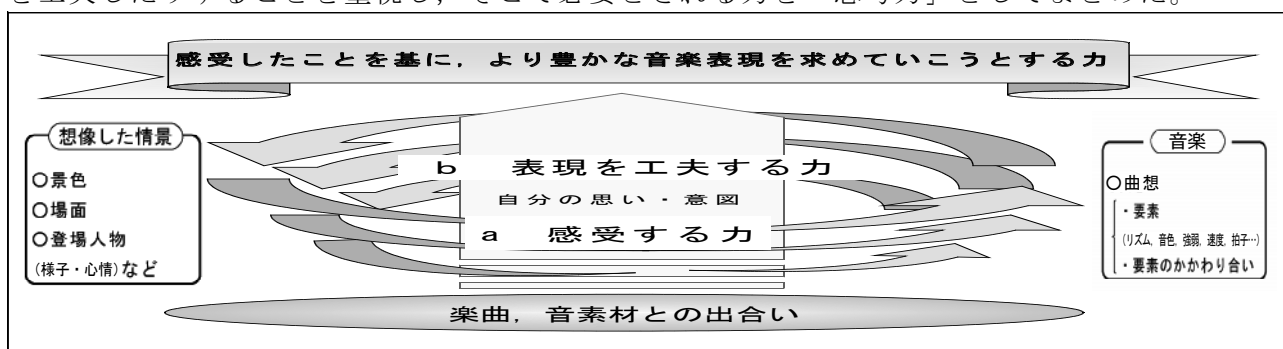
音楽科

1 育成したい「思考力」

- a 感受する力：音楽を形づくっている要素や、その関わり合いから生まれる曲想を基に、音楽の情景を想像する力
- b 表現を工夫する力：音楽から想像した情景と結び付けながら、音楽を形づくっている要素や、その関わり合い方を、自分の思いや意図をもって創意工夫する力

小学校学習指導要領において、表現及び鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として示されている。そこでは、音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取る際に聴き取るべき音楽の要素が明確に示された。

そこで、本校音楽科では、その〔共通事項〕に示された音楽の要素を基に感受したり、表現を工夫したりすることを重視し、そこで必要とされる力を「思考力」としてまとめた。



(1) 感受する力

音楽は、リズムや音色、強弱等のさまざまな要素により特徴付けられている。そしてこれらの要素の関わり合い方によって独自の構造をもち、それが楽曲に固有の曲想を生み出す。

これら楽曲の独自性を基に、そこから情景を想像する力が「感受する力」である。このように「感受する力」とは、音楽的な刺激を受け取るという受動的な面にとどまらず、その刺激に対して自分の心象を形成するところまで含めて捉える。

また、実際の学習においては、『タッカ』のリズムがはずんでいて、踊っているような曲だなあ。」と音楽を特徴付けている要素から情景を想像することもあれば、逆に「お祭りのような曲だ。」と最初に情景が浮かび、続いてその根拠となる要素を聴き取っていくこともあろう。「感受する力」は、このように音楽の要素と情景の双方を行き来しながら高められていくのである。

以下に「感受する力」の実践例を紹介する。

第3学年「ストーリーを描きながら聴こう ―『ファランドール』―」の実践より

【本単元で育成したい「思考力」】

音楽を特徴付けている要素から二つの旋律を聴き分け、楽曲全体の構成に着目することで情景を豊かに想像する力

子どもたちは音楽鑑賞をする際に、強弱、速度、音色、高さ等、音楽を特徴付けている要素に着目して旋律の違いを聴き分けている。この『ファランドール』の鑑賞において、子どもたちは、まず三つの場面の旋律を聴いた。そして、始めの場面で繰り返された旋律からは「王様の歩き方が速くなった。」と感じ取った。さらに、別の旋律へと変化した中の場面では「登場人物が

「変わり、賑やかな雰囲気が変わった。」、最後の場面では「みんなが仲よくなって一緒におどっているみたい。」と感じ取った。そこで、そう感じた理由を問うと、始めの場面では「同じ旋律が繰り返されていたから登場人物は同じで、音楽が速くなったから歩き方も速くなった。」と、中の場面では「旋律が変化して、だんだん音が大きくなっていったから。」と、最後の場面では「二つの旋律が重なっていて、明るい音になっているから。」という答えが返ってきた。



【登場人物の動作を考える】

（２）表現を工夫する力

既存の楽曲の演奏を工夫する際には、自分の思いや意図を明確にもつことが求められている。そして、その思いや意図に合った表現をするために、音楽を形づくっている要素や、その関わり合い方を創意工夫するのである。

具体的には、例えば「速度の工夫」のように要素自体を工夫することもあれば、「旋律の呼応」のように単一要素の関わり合い方の工夫、さらには、「旋律とそれを演奏する楽器」のように別の要素の関わり合い方の工夫もある。

なお、この「表現を工夫する力」は、上で述べた「感受する力」に支えられていることは言うまでもない。情景を想像することで、「このような音楽にしたい」という思いが一層強まるからである。また、音楽を形づくっている要素が、楽曲にどのように働きかけるかを感じ、理解していなければ、要素を選んだり組み合わせたりすることもできないからである。

以下に「表現を工夫する力」の実践例を紹介する。

第2学年「ゆかいな音楽をつくろう ―『ゆかいな時計』―」の実践より

【本単元で育成したい「思考力」】

テーマに沿って様々なリズムをつくり、それらのリズムを組み合わせて各場面にあわしい表現を工夫する力

子どもたちは「始め」「中」「おわり」の三つの場面から、音楽でそうじの様子を表そうとした。そのために、掃く、拭く、拾う等そうじの様子を表す1小節単位のリズムを数種類つくった。これらのリズムを組み合わせて音楽をつくるのだが、リズムを選択することができても、場面ごとにまとまりのある表現をすればよいことに着目できていない。そのため、始めの場面よりも仕事が増え、たくさんの音が聞こえてくる中の場面を表そうとしても、あまり変化が感じられない。

そこで、単元の冒頭で鑑賞した『ゆかいな時計』のリズム楽譜を提示すると、作曲者のアンダソンは始めの場面から中の場面へと大きく変化させたリズムを用いたり、二つの異なるリズムを重ねたりしていることに、子どもたちは気付くことができた。その後の活動では、作曲者の工夫を取り入れようと、繰り返す回数や変化させる部分、重ねるところを手拍子で試していく子どもの姿が見られた。そして、「掃く音と机を運ぶ音を重ねたら、忙しそうな感じになった。」等、前の場面から様子の変化していることを表すリズムを組み立てられるようになった。



【付箋を操作し、リズムを組み立てる】

このように、音楽の仕組みについての知識を用いて情景にあわしい表現を工夫することが「表現を工夫する力」である。

2 思考活動を保障するために

○ 学習対象をいくつかの部分に分け、それらを子どもが選択できるようにする

第4学年「拍を感じて聴こう つくろう 歌ってみよう」では、拍子による表現の違いに着目させようとした。しかし、拍子を比較して聴かせようとしても、子どもたちの意識は旋律や楽器編成等の要素に向かってしまいがちであり、拍子の違いのみに着目して曲想を感じ取らせることが難しい。

そこで、3拍子の『メヌエット』と、これを教師が2拍子、4拍子にアレンジしたピアノ演奏を鑑賞させることで、拍子に焦点化して比較できるようにした。さらに、既習曲を拍子ごとに分類していくことで、「2拍子は歩くのにぴったりで、元気がいい。」「3拍子は優雅に踊っているみたい。」等、拍子による曲想の特徴に気付いていった。それを手がかりにその後のリズム唱で、子どもたちが『いるか』の詩からイメージした様子に合う拍子を選択した。そして、拍子の感じを生かしながら表現を工夫していった。



【イメージに合う拍子を選択】

○ 視覚等の感覚に働きかけることで、イメージを広げる

第5学年「情景を思い浮かべながら聴こう ―ピアノ五重奏曲『ます』―」では、主題と楽器、強弱、速度、調性等の要素が変化した、五通りの変奏を鑑賞した。その際、主題と各変奏を比較し、その変化を捉えつつ、情景が移り変わっていく様子を豊かに想像できるようにしたいと考えた。そのために、ますの様子は旋律、川の様子は伴奏から聴き取るのだが、二つの様子を別々に捉えるだけでは楽曲をイメージすることが難しい。そこで、二つの情景を結び付けるために、簡単な一つのイラストに表すことにした。また、その根拠となる、音楽を特徴付けている要素にも着目し、付箋に気付きを書き出した。このように変奏ごとに一つのイラストにまとめることで、子どもはイメージしたことを一目で捉えられるようになり、変奏ごとの移り変わりを比較することにつながった。

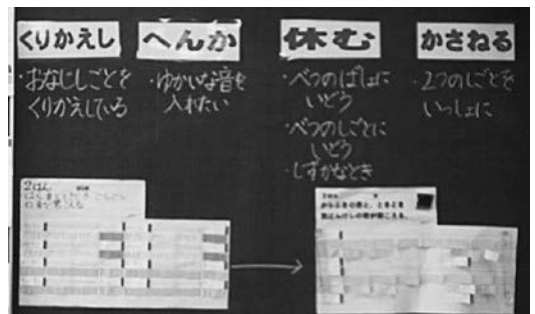


【旋律と伴奏から捉えた情景】

○ 学習対象の変化の前後と、その間を明確にする

第2学年「ゆかいな音楽をつくろう」では、そうじの様子を「始め」・「中」・「おわり」の三つの場面で表現しようとした。子どもたちは、自分たちのつくったリズムを組み合わせるのだが、場面の変化を表すことが難しい。そこで、場面の変化が分かりやすく表現されている鑑賞曲『ゆかいな時計』のリズム楽譜を提示した。自分たちの作品と比較することで、『ゆかいな時計』の楽譜に見られる繰り返し、変化、重ねる等の工夫を、自分たちの作品に取り入れれば、場面の変化を表す作品になりそうだと気付いていった。

そして、「中の場面が一番忙しいから、二つのリズムを重ねてみよう。」というように、場面の変化を表す工夫ができるようになってきた。



【自分の作品と『ゆかいな時計』のリズムを比較】

「配列・作業化」については、次頁以降の実践例で詳細を記載する。